弘大農学生命科学部 同窓会会報

第２７号

平成２１年５月　発　行
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会
TEL ０１７２－３６－２１１１
FAX ０１７２－３９－３７５０
振替 ０２３４０－７－５６４
印刷（株）　笹　軽印刷

大学全入時代下のもとで
鈴木裕之新学部長への期待
～新学部長就任に寄せて～

同窓会長　三　上　　巽（たつみ）

窺われる学部改革を期待しての選出

今春２月中旬、地元紙・東奥日報「この人」欄に「弘大農学生命科学部の次期学部長に就任する『鈴木裕之（すずきひろゆき）』将来の農村リーダーを育てたい」との記事を目にし、思わず嬉しさと安堵感ない交ぜの心境にかられました。また社会面の前のページ記載の学部長選出概要の記事では「選挙は学部の

学部校舎から望む岩木山

教員68人で行い第１次投票で鈴木教授が過半数を獲得し選出」とのこと。この記事に関連し私は、学部事務局に「学部長選挙は立候補制ですか？」と尋ねましたところ「そうでは無く各自他薦１人１票方式」とのこと。このことから窺われるのは、このたびの学部長選出は２期３年半に亘り法人化後の学部改革に取り組んでこられた高橋学部長を補佐する副学部長職にあった鈴木教授への信頼・期待感がもたらした結果ではなかろうか。そしてこのあたりのことは先の「この人」欄の鈴木教授のコメントに垣間見ることができる。「法人化後、運営交付金が年々減額される厳しい経営が求められる中、現（高橋）学部長は人事予算面で改革を断行してきた。副学部長として３年半補佐役を務めてきた私を選んだということは、改革を進めていくよう背中を押されたのだと思う。」と述べられている。何とこの的を得た発言と謙虚なお人柄。それにしても敢えて不肖・私が喝采の意を表したいのは、法人化後５年目を迎え豊川好司・高橋秀直両学部長主導のもとに進めてこられた学部改革・改善の方針を、鈴木新学部長のもとで継続・前進していただきたいという大多数の学部教員陣の真摯かつ熱き期待・願望がもたらしたものに他ならないと推察するからであります。

学部改革の推進に向けて

鈴木新学部長の改革に向けてのより仔細な抱負の内容を「この人」欄に見るに、

①改革とは、定年退職する教授の後任に20・30代の若い助教・准教授クラスを招くという弘大の中でも農学生命科学部独自の方式のこと。スタッフ数は減らさず総人件費を抑制できることが導入のメリット・狙いである。

②また大学全入時代下のもとで入学志望学生の確保が最重要課題である中、農・食・環境・生物学に至る多種多様な分野を擁するのが本学部の魅力となっている。セールスポイントに磨きをかけるためにも（高橋学部長時代の）改革方針の堅持をしたい。

③更には学部の地域との連携・協調による貢献対策として、「研究協力はもとより、将来の農村を担うリーダーを育てることが大事。本年度から地域の農業系高校生を対象とした『アグリカレッジ』を開設したが、このことを含め後継者育成の基盤づくりにあたりたい。

等々、鈴木新学部長の改革に向けての方針は、静かな語り口ながら意欲に満ち溢れたものであると記者は伝えている。これらの趣旨を承るにつけ、学部同窓会の立場からも頼もしさ禁じ得ない限りであります。

いずれにいたしましても高橋秀直・前学部長、３年半に亘る学部長職大変ご苦労様でございました。

併せまして鈴木裕之学部長、私共の母校・弘大農学生命科学部の振興・発展のため、なお一層の学部改革推進に向けてのご活躍をご期待申しあげます。

事務局から

平成17－18年度総会で「弘前大学農学生命科学部同窓会における個人情報の取り扱いについて」が制定されました。支部会開催などで、会員情報が必要な際には「同窓生情報活用依頼書」を郵送またはファックスでお送り下さい。様式は会報第23号（2005年６月１日発行）の10ページにあります。

同窓会ホームページ（http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/）からもダウンロードできます。

教育・研究成果の向上を目指して

農学生命科学部長　鈴　木　裕　之

同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。平素より本学部へご支援頂きまして心から感謝申し上げます。この４月、農学生命科学部長に就任いたしました。専門は畜産学（家畜繁殖学）で、1988年（昭和63年）に着任以来20年あまりが経ちました。この３年半は、高橋秀直前学部長の学部改革を副学部長としてお手伝いして参りました。

高橋前学部長は、国立大学法人化という新しい環境の下で、学部の教育・研究を向上させ、また地域貢献を推進するために学部改革を計画的に推進されました。例えば、経費削減が強く求められる中で、本学部ではティーチングスタッフ数を減らさずに、若手教員を増やすことによる人件費削減策を取り入れました。平均年齢を下げることにより全体の経費を縮減しようとする計画です。人事が進むにつれ若手教員の割合が増え、彼らの活躍の場も増えてきましたので、学習・実習している学生達にも活気が出てきたようです。このように、人事制度の改革を進めたことにより、教員組織の若返りと教育体制の充実が着々と進んでおります。

法人化後の喫緊の課題でありました学科再編も高橋前学部長の主導により達成されました。その詳細については、同窓会報第26号に詳しく報告されております。1997年以来の「生物機能科学科」、「応用生命工学科」、「生物生産科学科」、「地域環境科学科」の４学科体制から、2008年４月に「生物学科」、「分子生命科学科」、「生物資源学科」、「園芸農学科」、「地域環境工学科」の５学科体制に改組されました。学科再編の眼目は「学科の個性を出し、きめ細かい教育」を目指すことです。

少子化による18歳人口の減少のため、大学全入時代に突入したとも言われる昨今、大学や学部の個性化を打ち出していくことが肝要です。さらに、志願者を確保するために学部の魅力を受験生に対して広報するのも重要な活動になっております。そのため、県内外の高校を精力的に訪問して学部説明をしております。訪問先で同窓生にお会いすることが時々ありますが、その様な時は、激励を受けたような感動を覚えます。有り難いことです。毎年８月には受験生に大学を開放し、入試説明と情報提供をするための「オープンキャンパス」を実施しております。訪問者への対応について、学部レベルでもいろいろ工夫いたしましたところ、年々参加者が増加して昨年の学部訪問者が600名を超え、参加者からは好評を得たようです。

運営費交付金の縮減など、大学を巡る状況は年々厳しさを増している中、大学教育のあり方をめぐる議論が本格化しております。本学部の教育と研究の目標に沿ったカリキュラムで教育し、学生の質を保証することが、今後一層求められることになります。したがって、本学部でも教育の実質化のための対応策について早急に検討し、学部の個性化を図り、かつ学部の組織力を高めていく努力をしていかなければなりません。今後とも、同窓会会員の皆様方のご理解を頂き、御協力とご支援をお願い申し上げます。

定年退職教職員からの寄稿～1

現代学生気質？

小　原　良　孝

この3月31日、35年勤めた弘前大学を定年退職しました。1974年、30歳のときに理学部生物学科の助手として採用され、千葉滋男先生が担当する「動物系統形態学実験」や「臨海実習」の補助からスタートしました。私は1963年から67年にかけて、弘前大学の文理学部理学科で学びましたが、生物学を専攻した同期生は７名だけで、教授陣は助教授・助手を含め11名もおりました。学生数の1.5倍もの先生方がおりましたので、学生が教授陣の３倍もいる現在とくらべると、当時は非常に恵まれた環境で教育をうけていたのがよくわかります。学生実験で夜遅くまでかかった時など、先生の奢りで“飲み”に連れて行っていただいたりもしたものでした。赴任当初、学生数はすでに20名となっていましたが、２～３年後には30名にまで増え、助教授となった私が担当した学生実験も「動物系統分類学実験」に変わりました。当時、前後期あわせて30回の学生実験を担当していましたが、若かったせいもあり、要領の悪い学生達につき合って毎回、夜の10時、11時までやっていました。私もそうでしたが、学生たちも夜遅くまで居残って議論しながらやる実験を楽しんでいたように思います。女子学生が遅くなった場合は大がい男子学生が送り、時には私の車で送ってあげたこともありました。1997年、農学生命科学部になってからは、「遺伝情報科学実験」を担当しましたが、夕方５時、６時には全員実験を終えるようにしました。夜遅くまでかかるような実験をさせると、学生から文句が出てしまうのです。

実験・実習での学生たちの取組み姿勢も変わってきたように思います。最近はほとんどの学生がカメラ付携帯電話を持っていて、ネズミやハムスターの解剖を学生たちの前でデモンストレーションすると、多くの学生が携帯で解剖の様子を撮影し、顕微鏡観察では携帯電話を接眼レンズにあてて撮影し、レポートに貼りつける学生もいます。良くまとめている先輩のレポートのコピーを参考までに出しておくと、やはりこぞって写メールに走るのです。レポートを書かせると引用文献・参考文献はほとんどインターネットからの引用で、図書館などで学術的な文献に目を通し引用することは、レポートをみる限りあまりないようです。便利な世の中になるのはいいですが、何かが欠けているように思うのは退職教員の杞憂でしょうか？

定年退職教職員からの寄稿～2

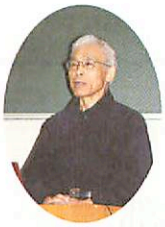
リンゴとともに38年

浅　田　武　典

昭和46年に名古屋から弘前に赴任した。弘前駅に降り立ったとき駅前通りは夕映えの中人が少なく、寂しさを感じたことを覚えている。しかしそれよりも言葉の方が強烈な印象を受けた。青森駅から弘前に向かう列車のなかで隣の席で話し込んでいるおばさんたちの会話は全く理解不能であった。勤め始めて間もない頃りんご協会の剪定講習会に参加した。講師は小笠原惣助氏であったが、

午前中の講義も午後の実践講習もほとんど何を言っておられるのか分からなかった。とてつもなく文化の違う世界に来たものだと思った。私の仕事は果樹園芸学で、リンゴの栽培が専門である。以来38年にわたり津軽弁の難しさと素晴らしさと両方を勉強することになった。リンゴ農家の方々との付き合いから思うことは、時代の移り変わりである。昭和4、50年代は農家もかなり豊かであった。剪定して畑から戻るとき、鍛冶町で一杯飲んでから帰った人もいたと聞いた。一緒に飲めば何軒でも連れて歩いてくれ、当然のように彼らが面倒をみてくれた。昭和の終わり頃でも似たような付き合いで、大学の先生に払わせられないといって気を使ってもらった。しかし、平成に入って何年過ぎると、ワリカンを申し出ればその通りになることが多くなり、農家経営の時代の変化を感じざるを得なかった。果樹教室では、農業に関係する仕事に就く人が多いが、リンゴ農家を継ぐ人もかなりいた。総卒業生数246人中32人であり、13%にのぼる。リンゴの価格がとても気になる昨今なので、厳しい状況の中頑張っていると察している。ついこの間、私が関係した卒業生が集まってくれた。話題は農業の将来になり、生産者、公務員、それに会社員みんな一緒になって、農業を何とかしようと活躍している人の取り組みや都市から農業への期待など熱い話となった。リンゴ畑の価格が大きく下がった時、「今に都会から村に戻る時代が来るさ」と語った古老の言葉を思いだした。日本の農業を支えている人たちを社会に送り出してきたのだとひそかに確信できた私であった。長い間、学部の教職員と同窓会の方々に大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

定年退職教職員からの寄稿～3



40年前・赴任当時の弘大風景

高　橋　秀　直

弘前大学農学部助手の就職話が届いたのは、1969年初夏、真夜中の大学院研究室でした。返事は朝までにと甚だ性急でしたが、大学院を出ても就職先がない状況がすでに始まっていましたので、話に飛び乗ることにしました。９月１日採用というので８月末に荷物と一緒に弘前に来て見ると、全国的に吹き荒れていた“大学封鎖”が弘大にも波及して事務局が学生によって封鎖されており、その対応に追われて私の採用は実はまだ教授会を通っていないと言うのです。やむなく荷物を市内に預け、札幌に戻って教授会承認を待ちました。

漸く11月に赴任。事務局封鎖は機動隊導入で終わっていて、代わりに学生側要求をめぐって全学集会が体育館で開かれており、多数の学生、教職員が見守るなか柳川学長が学生の追及を受けていました。５時過ぎ、学長は国大協の会議に出席しなければならないからと、右から出るように見せかけてさっと左から出るという早業で会場から脱出、姿を消しました。

弘大の封鎖は、東大安田講堂に象徴される大学封鎖とは、本質的には違うと私は思いました。全国的なそれは“大学解体”がスローガンだったので、大学側になにかの要求を突きつけることはありませんでしたが、弘大では７つの要求が掲げられており、内容も学生らしいまともなものでした。封鎖といっても教職員は出入りできていたようで、教官との話し合いは行われており、実態は封鎖というより一部学生の座り込みに近かったかも知れません。

教授会ではできたばかりの学生自治会の要求への対応が論議される一方で、封鎖学生の処分が議題に上りました。全学で５名の学生が停学や退学処分の対象になり、１名が農学部学生でした。私は、手段は乱暴だが要求内容はまともであるとの

理由で処分に反対しましたが、反対は１人、処分が承認されました。この処分は、処分とともに正当な要求をも流してしまうことになり、それが、教員が成績評価権を濫用して特定の思想傾向の学生を排除しようとした翌春の“岩岡問題”を生む土壌となったと思います。このときに学生要求を“学ぶ権利”として認めていれば、“岩岡問題”に対する大学の結論を出すのにあれほど長い歳月を要することはなかったと思います。

当時の弘大は、父母からの後援寄金を大学上層部や後援会幹部が私物化していたことが発覚、“後援会問題”に揺れていました。これを機に労働組合や学生自治会が漸く誕生しましたが、教員が学部を超えて集まることさえ憚られる雰囲気がまだあり、時代に取り残されているような大学でした。

「学園だより」編集委から新任教員として原稿を依頼されたので、目にした全学集会の模様と大学側の対応を批判する一文を寄せましたが、学生部長に掲載を拒否され、やむなく職員組合の機関紙に発表したなどという経緯もありました。

あれから40年。講座制から大講座制（講座制の事実上の廃止）へ、そして大講座制の廃止へ、農学部から農学生命科学部へ、国立大学から法人化大学へ、――百数十年の国立大学の歴史のもとでこれほど変貌を遂げた時代はなかったと思います。その結果、弘大は自由と活気に満ちた大学となったと言える確信は、残念ながらありません。法人化後は、なにかというと予算カット、賃金カットをちらつかせた評価、評価のオンパレード、成果主義とカネの話に充ちて、ギスギスした大学になってしまったように感じます。

さいわい、学生の若さ、伸び盛りは昔も今も変わりません。昔よりは手間ヒマ掛かるとはいえ、勘所を押さえて助言すれば、あっという間に成長します。身辺整理で出てくる昔の講義やゼミの資料などを見ると、よくもこんな難しいことを、それも頭ごなしに教えていたものだと反省させられます。農経には「経済学」と卒論しかないと陰で言っていた諸君に、お詫びしたいと思います。

定年退職教職員からの寄稿～４

最後の配属先「農学生命科学部」

古　川　文　男

弘前大学に勤務して40有余年、旧経理部と病院を何回か往復し、会計事務を執ってきたが、農学部も含めて農学生命科学部勤務は勿論初めてのことで、他の学部もほとんど経験がなかった。旧経理部に所属していた時代に会計内部監査等で何回か学部及び農場にお邪魔した時ぐらいであろう。学部事務については、学部毎に微妙に雰囲気が違い、新鮮なものを感じる。前任部署は病院で、24時間営業で一見活気がある反面、見かける人は当然のことながら病人が多く、姿勢も真摯にならざるを得ない。文京地区に来ると、これまた当然のことながら学生が主役である。元気で明るく、年寄りには若さをもらう絶好のポジションである。本学部に配置換前には、病院の経営分析・経営企画が担当で毎日のベッド稼働率であるとか、外来患者数やらを気にかけ、日夜頭の中で数字がちらつく毎日でした。

残念ながら、これまで農業系には全く縁がなく見ること聞くこと初体験。女子学生も少ないとの先入観もまた修正せざるを得ない状況で、なにもかも一から勉強。これもまた、楽しいことであるが、吸収力の鈍った惚けた頭にはいかんせん期間が短すぎた。もっと若いときに経験したかったと思ってももう遅い。２年間仕事を通じ農学生命科学部の学生たちを若干でも知り得たことは、貴重な経験である。生涯の宝物に感じるときが来ると信じています。仕事については、学部事情に慣れない所為もあり、高橋学部長にだっこにおんぶ状

態で申し訳なく思っています。高橋学部長も同時期に定年となるが、事務系は満60才、教員は満65才で定年のため５才違いというのに、そのエネルギッシュなこと！随分若い時分から体型も変わらず、その姿勢には敬服しています。他の先生方も若いのは、日常若い学生に接してそのエネルギーを吸収しているからだろうか？いずれにしても、羨ましがってばかりは居られず、これからは、この思いを抱き若返りを図りたいと思っています。

最後に、お世話になった職場の皆様、同窓会会員の皆様に感謝申し上げるとともに、70周年、80周年、100周年と記念式典を続けられるよう農学生命科学部の繁栄と、農学生命科学部同窓会の繁栄を祈念申し上げます。

研究室だより

“農業水利研究室の同窓会「弘水会」”

農学生命科学部地域環境工学科の農業水利学研究室では、農学部農学科時代の農業工学教室、農業工学科の農業水利学教室の卒業生をはじめ、いわゆる農業水利系の研究室を卒業した同窓生を中心に「弘水会」という研究室単位での同窓会活動を行っています。今現在の研究室卒業生は300名を越えています。「弘水会」では篠遉三郎先生（弘前大学名誉教授）が名誉会長になられており、総会・懇親会は、４年に１回、オリンピックの開催年に行うことにしています。平成20年は中国の北京でオリンピックが開催され、弘水会総会も８回目を迎えました。したがって、弘水同窓会ができてから32年目となります。なお、総会・懇親会には研究室卒業生にこだわらず参加者を募っています。今回は、平成20年11月15日に大鰐町の「大鰐山荘」において、昭和34年卒業の山形さんから平成18年卒業の福田さんまでの総勢36名の参加を得て開催されました。ただ、名誉会長の篠遉先生が都合により急遽出席できなくなったことが報告され、篠遉先生からのお手紙が紹介されました。また、懇親会では、４年ぶりの再会に場は大いに盛り上がり、夜遅くまで楽しく過ごしました。翌日は、４年後の2012年にイギリスのロンドンで開かれるオリンピック年の再会を約束し散会しました。

（地域環境工学科教員　泉　完：農業水利学研究室）

第８回　弘水会総会　平成20年11月15日　於:大鰐山荘

佐野輝男教授の学会賞受賞に寄せて

植物病理学教室　藤　田　　隆

平成20年度日本植物病理学会大会が平成20年４月26日から３日間に亘り、ＮＨＫ朝のドラマ‘だんだん’の舞台となった宍道湖を臨む城下町松江市において開催されました。

本大会の初日に恒例となっている学会賞の授賞式並びに受賞者講演が行われ、本学部生物資源学科 植物病理学研究室の佐野輝男先生が平成20年度日本植物病理学会賞を受賞されました。

日本植物病理学会は大正５年（1916）に発足して以来、我国の研究者による数多くの世界に誇るべき業績を残しており、国際的にも本研究分野は高く評価されております。先生の受賞対象となった研究は「本邦に発生するウイロイドの研究」というテーマでした。

先生は母校でもある前任地の北海道大学農学部に居られた時から、恩師の四方英四郎現北海道大学名誉教授のもとで一貫して植物ウイルス及びウイロイドの研究をされており、特に我国では最初のウイロイド病の発見となった‘ホップ矮化ウイロイド（Hop stunt viroid, 以下HSVdと略記）’について分子構造と病原性について精力的に研究されてきました。そもそもウイロイド（Viroid）は‘ウイルスもどき’という意味から由来しており、1971年アメリカ農務省ベルツビル（佐野先生の海外研修地でもある）の Diener 博士により、poteto spindle tuber 病（ジャガイモやせいも病；我国では未発生）の病原体として新しく発見され、ウイルスとは異なり蛋白質を翻訳しないことから‘裸の RNA 病原体’と呼ばれております。

我国では‘ホップ矮化病’の発生は昭和40年（1965）頃からでホップの奇病或いは外様（とざま）病などと呼ばれ、長い間その原因が不明とされていました。

しかし、1977年に北海道大学の四方・佐々木らの研究によりホップ矮化病は‘ウイロイド’が病原であることが明らかになりました。その後の本病に関する一連の研究は佐野先生が引き継がれ現在に至っております。

我国のホップ栽培は明治の初め、国産ビール醸造の開始と共に欧米から導入され、栽培開始後まもなく‘矮化病’が発生しました。一方、欧米のホップは長い栽培歴史の中でも本病の発生は今日まで知られていません。

佐野先生はこれの‘謎’を解明するため、様々な農作物に発生するウイロイドや病原体未解明病害とウイロイドとの関連について精査し、HSVdの変異株がブドウ・カンキツ・スモモ・モモなどの世界中どこでも栽培されている果樹類に感染していることを明らかにされました。

さらに、我国の東北地方で栽培されているホップから分離されている HSVd の遺伝子解析を行い、ブドウ樹に潜在感染（病徴を現さない）していたウイロイドがホップ矮化病の伝染源にほぼ間違いないことを突き止めました。

また先生は我国で栽培されている様々な植物からウイロイドを分離・同定され、その分子構造の特徴から迅速且つ極めて鋭敏な検出診断法を確立されました。これらの診断技術は国内においてウイロイドの検出に広く利用されております。

現在、先生はウイロイド感染植物中のウイロイドを標的とする‘RNA サイレンシング機構の解明’と、より効果的な‘ウイロイド防衛戦略の構築’に向けた研究を進めております。これらの研究成果は国内はもとより海外においても高く評価されており、世界的な‘ウイロイド研究’の第一人者であります。

先生は温厚で飾らないお人柄と該博な知識をお持ちで学生の信望も厚く、現在、植物病理学研究室には留学生を含む20名を超える学生が所属し、昼夜を問わず研究に励んでおります。

先生はまた「教育と研究の成果は人の和にかかっている」をモットーに学生の教育や研究指導に当たられ、多数の有能な人材を社会に送り出しております。此度の栄えある学会賞受賞は誠におめでたく、名誉なことであり今後の研究活動において一層の励みとなります。

佐野先生のたゆまぬご努力に我々一同心からお祝いを申し上げるとともに、ご自愛のうえ、今後とも御指導頂きますようお願いして筆を擱きます。

学生就職支援センターから

平成19年度卒業生の就職率は弘前大学歴代１位の97.2%でした。そして平成20年８月発行の「読売ウイークリー」に、就職に「超」強い大学400という記事が載りました。その中で就職決定者300人以上の大学で弘前大学は全国で48位となり、学部別では10位以内となった学部もあり、我が農学生命科学部も、農学部としては７位入賞（？）となります。

ところがこの直後、一転して世界的な大不況がおとずれ、大量解雇とか、内定取り消しなどの記事が飛び交い、今年の卒業・修了者はもちろん、同窓会ＯＢの皆様にもご心配をかけたかと思われます。しかしながら今春の卒業・修了者の就職率も何とか例年並にこぎつけたかと思われます。これは学生諸君の努力の賜物であることはいうまでもありませんが、以下の支援体制も少しは機能しているのかなと思っています。

学生就職支援センターは、弘前大学が国立大学法人になった平成16年４月に設置されました。それまで各学部ごとだった就職関連の窓口を一本化し、各学部間の情報交換と連携をとっています。センターにはセンター長以下、専任の副センター長、各学部の就職関連委員を兼ねているセンター兼任教員、学生課就職支援室職員、専任の就職相談委員２名がおります。就職関連の情報はすべてここに集められ、学生さんは自由に出入りしこれらを見ることができます。もちろんこれらはホームページ上にも公開されています。センターでは業界研究会、個別企業説明会などの各種ガイダンスを企画し、個人的な就職相談や模擬面接なども行っています。またインターンシップやキャリア教育「社会と私」などにもかかわっています。今年も３年生および修士１年生を対象とした学部別の就職ガイダンスを６月から１月にかけて農生学部だけで５回実施し、２月には約200社の企業に参加いただき、合同企業説明会を実施しました。

今３月、来春卒業・修了予定の皆さんは就職活動真っ只中というところでしょう。企業の採用予定が気になるところですが、冬の次には春が来るとか、明けない夜はないとか言います。さる就職情報会社の情報によりますと、確かに採用人数を減らす予定の会社も見られますが逆に「増やす」とか「維持」というところも多いようです。皆さんが無事希望の仕事に就けることを祈っています。

（センター兼任教員：福地 博）

平成20年度卒業生・修了生の祝賀会ならびに就職・進学先

平成20年度の弘前大学卒業証書授与式が平成20年３月24日午前10時から弘前市民会館で行われた。農学生命科学部の卒業生は174名であった。大学院の学位記授与式は午後１時から弘前大学創立50周年記念会館で行われ、農学生命科学研究科修了生39人に対して、修士（農学生命科学）の学位が授与された。平成20年度末現在で、農学部と農学生命科学部を合わせての卒業生は6,019人に、研究科の修了生は農学研究科と農学生命科学研究科を合わせて707人になった。

授与式終了後、同窓会主催で恒例の記念写真撮影（学部校舎正面玄関前）が、学部・後援会との共催で祝賀会（大学会館）が行われた。

卒業・祝賀会にて

本年度の卒業・修了生の就職先および進学先は以下の通りである（括弧内に数字を記入した場合以外は各１名である）。以下に記す人数には早期修了者・平成20年９月卒業者数も含まれる。

生物機能科学科（卒業者数37人）
㈱Ｎｏ．１、㈱イーエス総合研究所、㈱カネボウ化粧品、㈱サクラバ、㈱パル、㈱マクニカ、㈱ミカコー、㈱山田製作所、㈱陸奥新報社、(社)青森県畜産物価安定基金協会、ＹＫＫ ＡＰ㈱、シード㈱、スターゼン㈱、フタバ食品㈱、群馬鶏卵㈱、健生病院、小松市農業協同組合、南開工業㈱、日建学院、北陸コカ・コーラプロダクツ㈱、地方公務員、弘前大学大学院(15)、北海道大学大学院、千葉大学大学院、総合研究大学院大学

応用生命工学科（卒業者数50人）
㈱イエローハット、㈱ヴイ・ディー・エフ・サンロイヤル、㈱クリエイト　エス・ディー、㈱ロイズコンフェクト、㈱橋本産業、㈱生活品質科学研究所、(財)日本冷凍食品検査協会、(社)青森県薬剤師会衛生検査センター、ＫＤＤＩ㈱、アース環境サービス㈱、イーサポートリンク㈱、おいらせ農業協同組合、サンマルコ食品㈱、フォーラムスタッフ㈱、ホクレン農業協同組合連合会、レオン自動機㈱、合同容器㈱、山崎製パン㈱、上士幌町農業協同組合、青年海外協力隊、大正富山医薬品㈱、日本イーライリリー㈱、日本ベーリンガーインゲルハイム㈱、日立電子サービス㈱、弘前大学大学院(19)、東京海洋大学大学院(2)、北海道大学大学院、筑波大学大学院、千葉大学大学院

生物生産科学科（卒業者数50人）
㈱アマダ、㈱ウオロク、㈱エイチ・アイ・エス、㈱サンワドー、㈱シイエヌエス、㈱ダイナム、㈱データベース、㈱トランスコスモス・テクノロジーズ、㈱ビューティ花壇、㈱大田花き、㈱中央コンタクト、ＴＯＫＹＯフレッシュ㈱、スターゼン㈱、ニプロファーマ㈱、はるやま商事㈱、横浜丸中青果㈱、岩手缶詰㈱、弘果弘前中央青果㈱、三菱農機㈱、三和缶詰㈱、自営業(建設)、自営業(農業)、青森オリンパス㈱、赤城乳業㈱、第一ブロイラー㈱、国家公務員、地方公務員(2)、弘前大学大学院(13)、東北大学大学院(2)、北海道大学大学院、帯広畜産大学大学院

地域環境科学科（卒業者数37人）
㈱いとく、㈱キンレイ、㈱サクラバ、㈱データベース、㈱デンコードー、㈱パスコ、㈱みちのく銀行、㈱青南商事、ＭＳＰ㈱、ガイヤ㈱、カジマ・リノベイト㈱、プライフーズ㈱、社会保険診療報酬支払基金、西日本くみあい飼料㈱、青森トヨタ自動車㈱、青森県農村工業協同組合連合会(ＪＡアオレン)、総合警備保障㈱、杜の都信用金庫、東日本高速道路㈱、東日本旅客鉄道㈱、北海道旅客鉄道㈱、日本コムシス㈱、日本コンクリート工業㈱、名古屋製酪㈱、地方公務員(7)、弘前大学大学院(3)、北海道大学大学院

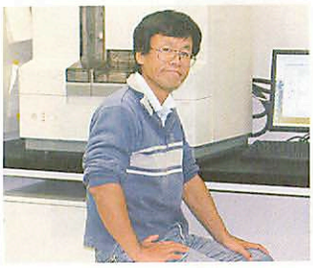
大学院農学生命科学研究科（修了者数39人）
ＮＢＣ㈱、興亜紙業㈱、日本メジフィジックス㈱、㈱シンジージャパン、㈱ニプロファーマ、㈱プライム・リンク、㈱ムトウ、(財)日本食品分析センター、Ｉｓ　Ｈｕｎｔ㈱、アサヌマコーポレーション㈱、よつ葉乳業㈱、ライオン㈱、合同酒精㈱、山崎製パン㈱、東洋水産㈱、日本ミルクコミュニティ㈱、勇心酒造㈱、㈱ボーデン、あすか製薬㈱、マルキュー㈱、旭タンカー㈱、三井農林㈱、大内新興化学工業㈱、朝日酒造㈱、日本植生㈱、日本工営㈱、公立学校教員：愛知県(2)、地方公務員、青年海外協力隊、自営業(農業)、岩手大学大学院連合農学研究科(4)

新任教員の自己紹介

前　田　智　雄　准教授（園芸農学科 園芸農学コース）

2008年８月に農学生命科学部に着任いたしました。北海道大学大学院修士課程修了後、北海道の民間企業で加工用野菜の栽培・育種等の研究や地域農業振興に関わる研究開発に携わって来ました。平成15年に社会人博士課程で学位を取得し、この度縁あって弘前大に参りました。専門は蔬菜園芸学です。園芸学はタネや畑から食卓にのぼる生産物や加工品に至るまでの、とても範囲が広い分野です。中でも、栽培環境と品質成分の関連に関する研究が私の得意とする分野です。これまでの社会人経験も活かしながら、青森をはじめとする北東北の農業や食品産業の発展、さらにそれを担ってくれる人材の育成を、他の分野の先生とも連携しながら進めていきたいと思っています。

石　田　　清　准教授（生物学科　生態環境コース）



2008年10月に農学生命科学部に赴任いたしました。大阪生まれですが関西の風土が肌に合わず、大学に入学してからの19年間は、ほとんど北海道で暮らしておりました。その後、転勤で関西に戻りましたが，またもや北国に回帰するという、まるで渡り鳥のような人生です。雪景色が大好きで、校舎から真っ白な岩木山や八甲田山が見えると心が踊ります。専門分野は森林生態学と保全生態学で、樹木の繁殖生態学と希少樹種の保全や遺伝に関わる研究を行ってきました。今後は、これらの研究に加えて、植物が寒冷な気候と多雪環境に対してどのように適応進化してきたのかという視点から、東北地方の森林と湿原の木本植物について、その多様性と成り立ちを解明していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

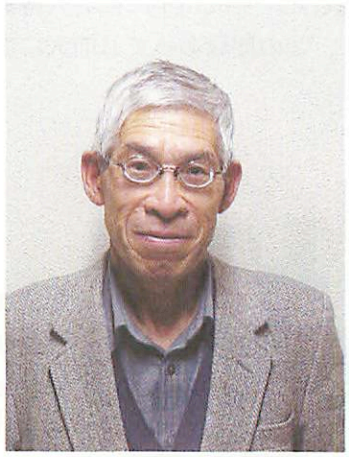
川　崎　通　夫　准教授（園芸農学科　園芸農学コース）

平成21年３月に赴任いたしました。赴任前までは名古屋大学大学院生命農学研究科において８年間ほど勤務をしておりました。これまでイモ類やイネなどの作物における生産・品質の成立、並びに、環境ストレス耐性に関する機能形態学的な研究を主として行ってきました。今後におきましては、基礎的な研究のみならず青森県における農業課題を意識した取組みも行っていけたらと考えています。また、学生諸氏に対しましては知識や技術だけではなく社会にとって重要な農学生命科学的感性を大きく育んでもらえるよう手助けが出来たらと思っています。よろしくお願い致します。

吉仲　　怜　助教（園芸農学科　食農経済コース）

４月１日に園芸農学科食農経済コースの助教に就任いたしました。山形県酒田市に生まれ、北海道大学大学院で長い学生生活を終え、本州に戻ってくることとなりました。これまでは農業経営学を専門とし、大規模農業経営体の経済分析を中心に、土地利用方式・輪作と農業経営の在り方を研究してきました。現在は農業経営の組織化や多角化に注目し、農業経営学の見地から足腰の強い地域農業発展に寄与できる研究を目指しております。青森農業についてはまだ勉強中ではございますので、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

教職員人事



宇野忠義先生

退　　職

平成21年３月末日

小原　良孝（おばら　よしたか）　教　授（生物学科）
浅田　武典（あさだ　たけのり）　准教授（園芸農学科）
宇野　忠義（うの　ただよし）　教　授（園芸農学科）
高橋　秀直（たかはし　ひでなお）　教　授（園芸農学科）
古川　文男（こがわ　ふみお）　事務長

採　　用

（新任）

前田　智雄（まえだ　ともお）　准教授（園芸農学科園芸農学コース）平成20年８月
石田　　清（いしだ　きよし）　准教授（生物学科生態環境コース）　平成20年10月
川崎　通夫（かわさき　みちお）　准教授（園芸農学科園芸農学コース）平成21年３月
吉仲　　怜（よしなか　さとし）　助　教（園芸農学科食農経済コース）平成21年４月
鳥丸　　猛（とりまる　たけし）　助　教（生物学科生態環境コース）　平成21年４月

（昇任）

石川　隆二（いしかわ　りゅうじ）　教　授（生物資源学科食料開発コース）平成20年11月

（特任）

村山　成治（むらやま　せいじ）　特任教授（金木農場）平成20年８月～

一部、卒業生の皆様に、「弘前大学同窓名鑑」作成のための調査カードが届いているようですが、この名鑑作成に当同窓会ならびに弘前大学同窓会は関わっておりません。

会費納入と住所通知のお願い

平成21－22年度会費5,000円を、同封致しました振込用紙でお納め下さいますようお願い致します。
また、転勤や転居で住所が変更になりましたら、事務局までご一報下さい。

同窓会事務局

〒036-8561　弘前市文京町３　弘前大学農学生命科学部同窓会

工藤　明　電話　0172－39－3842（FAX 兼用）　E-mail　akudo@cc. hirosaki-u. ac. jp
松崎　正敏　電話　0172－39－3804　E-mail　mma@cc. hirosaki-u. ac. jp
加藤　幸　電話　0172－39－3869（FAX 兼用）　E-mail　kato@cc. hirosaki-u. ac. jp

同窓会総会開催案内

平成21－22年度総会を下記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

記

日　時　平成21年７月４日（土）午後３時～４時
場　所　036-8356　弘前市上鞘師町24－１　「ホテルニューキャッスル」　電話　0172－36－1211
議　題　１　平成19－20年度事業報告
　　２　平成19－20年度会計報告
　　３　平成21－22年度事業計画
　　４　平成21－22年度予算
　　５　その他

なお、総会終了後に懇親会（会費3,000円）を行います。ご出席いただける会員におかれましては、準備の都合がございますので、６月19日までに事務局までご一報下さいますようお願いいたします。

事務局担当者　松崎正敏　電話　0172－39－3804　E-mail　mma@cc. hirosaki-u. ac. jp

弘前大学創立60周年記念事業への募金のお願い

平成20年６月から平成21年12月までの期間、弘前大学創立60周年記念事業の募金を行っています。

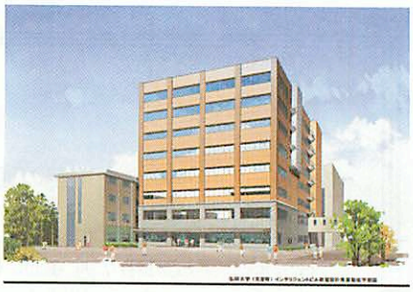
◆個人の場合　　１口５千円（できるだけ２口以上のご協力をお願いいたします）
◆法人の場合　　１口の金額は特に定めておりません
この寄付金は、所得税法、法人税法による税法上の優遇措置が受けられます。
★主な事業内容　　１　記念式典・記念講演会（平成21年６月６日）
　　２　国際交流基金の設立
　　３　弘前大学創立60周年記念史刊行
お振込先　　○青森銀行　弘前支店　普通　１２２７１４１
　　○みちのく銀行　弘前営業部　普通　２６１１７６７
　　○ゆうちょ銀行　０２２１０－２－５３９９１
　　○東奥信用金庫　富田支店　普通　１０９８９００
口座名義　　国立大学法人弘前大学　学長　遠藤正彦
【問合せ先】　国立大学法人弘前大学総務部総務課　tel　０１７２（３９）３００７

農学生命科学部での光景

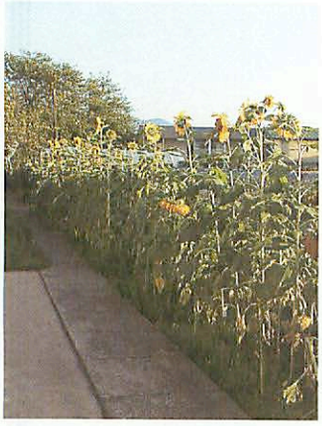
春にはチューリップ

今年の冬も、小雪暖冬

学部校舎北側に「コラボ弘大」建設中



60周年にあわせて「コラボ弘大」完成予定



夏にはヒマワリ

熱い思いのオープンキャンパス

暑い中でのオープンキャンパス

まだまだ、頑張っています

秋には稲穂

そういえば、文京町キャンパス禁煙宣言中

学内圃場にはキジもやってきます

最新の情報は同窓会ホームページでご覧下さい（http://nature. cc. hirosaki-u. ac. jp/dosokai/）